日本における「シニア演劇」の現状と展望
― 演劇の専門家が主導するシニア演劇を事例として ―

五島 朋子

Current Status and Prospects of “Senior Theatre” in Japan
A Case Study on Elder Theatres Directed by Professional Theatre Makers

GOTO Tomoko

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第17巻　第2号　抜刷
REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.17 / No.2
令和2年 12月 25日発行　　December 25, 2020

日本における「シニア演劇」の現状と展望

― 演劇の専門家が主導するシニア演劇を事例として ―

五島朋子*

Current Status and Prospects of “Senior Theatre” in Japan
A Case Study on Elder Theatres Directed by Professional Theatre Makers

GOTO Tomoko*

キーワード：「シニア演劇」，高齢者と演劇，演劇人，クリエイティブ・エイジング
Key Words: “Senior Theatre”, Theatre and Older People, Theatre Maker, Creative Aging

Ⅰ．はじめに：シニア演劇の隆盛

本稿の目的は，近年数多くの活動が見られるようになったアマチュアの中高年による演劇活動に着目し，その展開と特色を把握することを通じて，超高齢社会における「シニア演劇」の可能性と課題を検討することである。

周知のように日本の高齢化は急速に進展し，1970年に高齢化率（総人口に占める65歳以上の人口の割合）が７％を超える「高齢化社会」に，1994年には14％を超え「高齢社会」に，2007年に21％を超え「超高齢社会」に突入し，高齢人口の割合はその後も増加し続けている。平均寿命も男女共に延び，今や「人生100年時代」とも言われる[1]。長期化する老年期の過ごし方は高齢者個人のみならず，それを支える制度や仕組みの整備も含め，社会全体の課題となっている。

こうした背景の中，高齢者によるアマチュアの演劇活動が広がりを見せている。このような活動について情報を集めたウエッブサイト「シニア演劇Web」には，全国42の劇団や活動がリストアップされている[2]。「シニア」は概ね50代前後以上の中高年というおおまかなカテゴリーである。サイトを立ち上げた朝日（2015）は，把握しているだけで全国に約120前後の高齢者劇団があり，その数は2011年から倍増する勢いと報告している。

また2011年には，シニア劇団「かんじゅく座」を主宰する鯨エマが，「全国シニア演劇大会」を東京で開催，各地から16の団体が参加した[3]。それを契機に鯨は，高齢者演劇のネットワークづくりと交流を目的にNPO法人全国シニア演劇ネットワークを創設している。直近の2017年福岡大会では，北は仙台市から南は宮崎県延岡市まで全国14の団体が参加し，３日間に渡り作品上演するとともに相互の交流を深めた。表１に，開催延期となった2020年の参加予定団体まで含めこれまでの参加団体と活動拠点をまとめた。「シニア演劇」の全国的な広がりが分かる。

アマチュアの高齢者と演劇に関する研究は，医療や介護福祉における領域で一定の蓄積はあるものの，「治療」を目的とした演劇活動や観劇行為を検討しているものが中心である（園部2015，49）。また中高年のアマチュアによる演劇活動は，社会教育分野の研究で生涯学習活動の一ジャンルとして触れられることはあるが，個別具体的な事例を検討したものも，包括的な研究も見当たらない。演劇学の分野では，アマチュアの演劇活動に関する研究は，戦後の新劇運動とともに全国に広がり「自立演劇」「労働者演劇」「素人演劇」「青年演劇」などと呼ばれた演劇運動として多数の実践と文献があるものの，高齢者による演劇活動に的を絞ったものとしては，過去の新聞記事から高齢者の演劇活動のねらいを分析した園部（2015）ぐらいである。一方，文化政策やアートマネジメントの分野では，高齢者の芸術活動が趣味や娯楽という範囲を超えて，高齢者の新たな潜在能力を引き出し，ケアを受けるだけの対象とされる高齢者福祉の考え方に大きな疑問を投げかけるという可

*鳥取大学地域学部附属芸術文化センター・国際地域文化コース

能性の提示（吉本 2011）や，「クリエイティブ・エイジング」という概念（太下 2016）のもと，アマチュアの高齢者による演劇活動への着目があるが，事例紹介にとどまり，高齢者の演劇活動に焦点をあてた研究は端緒についたばかりと考えられる。

本稿では，まず先行研究・調査を踏まえ，日本におけるアマチュアの高齢者による演劇活動の広がりや特色を把握する。その上で 2000 年代ごろから活発になった，演劇の専門家や劇団が主導する高齢者演劇活動の実態とその意義を具体例を通して検討する。

歳を重ねた人の呼称は，「お年寄り」「老人」「高齢者」「シルバー」「シニア」と多様で，何歳から高齢者とするかは，歴史的背景や文化・社会制度，そして当事者の身体的精神的な要素によって異なる[4]。また高齢者の演劇活動を「シニア演劇」と呼ぶようになるのは比較的最近のことであるが，本稿では，参照した朝日のサイトおよび全国シニア演劇大会に習い，高齢者演劇を「シニア演劇」，活動団体を「シニア劇団」と呼ぶこととする。

表１　シニア演劇全国大会参加団体

参加劇団名（拠点）	2011年	2013年	2015年	2017年	2020年
かんじゅく座（東京都新宿区）	●	●	●	●	●
劇団笑劇（青森県おいらせ町）	●	●	●	●	
アトリエ劇研（京都市・大阪府高槻市）＊	●	●	●	●	
仙台シニア劇団まんざら（仙台市）		●	●	●	●
石見国くにびき 18 座（島根県浜田市）		●	●	●	●
劇団かぶつ（東京都八丈町）	●	●	●		●
南の風（北海道釧路市）	●	●		●	
のべおか笑銀座（宮崎県延岡市）	●	●		●	
らくらく演劇塾（奈良県生駒市）	●	●		●	
菜の花プラザシニア団（山形県川西町）＊		●	●	●	
ババーズ（福井県美山町）	●	●			
BB★GOLD（名古屋市）	●＊			●	●
完熟一期座・花組（愛媛県東温市）	●				
福祉劇団鶴亀（宮城県柴田町）	●				
高齢協劇団エルダーキャッツ（高松市）	●				
くくく楽会（愛媛県砥部町）	●				
中高年ミュージカル発起塾（大阪）	●				●
チャレンジャー（静岡県富士市）	●				
花筐（東京都）	●				
南アルプス桃源座（山梨県南アルプス市）		●			
大正浪漫一座（三重県松阪市）		●			
MA ロッキーズ（東京都）		●			
金沢市民芸術村ドラマ工房 Ag クルー（石川県）		●			
河辺わさび座（秋田県秋田市）			●		
かとれあ Project（仙台市）			●		
シルバーパンサー（福岡市）				●	
劇団かっこん党（福岡市）				●	●
表現集団ホワイトモス（東京都伊豆大島）					●
劇団サンシャイン（埼玉県川口市）					●
劇研 GO! 楽座（さいたま市）					●
劇団ひとりっこ（仙台市）					●
劇団大阪シニア演劇大学「豊麗線」（大阪市）					●

（筆者作成：＊については，注３参照）

II．シニア演劇の広がり

1. シニア演劇の活動数

現在，日本にはどの程度の数のシニア劇団があるのだろうか。大阪府箕面市の劇団すずしろを対象にシニア演劇の社会的意義について検討した梶谷の修士論文（2015）では，シニア演劇 Web のほか，新聞やインターネット検索によって，2014 年時点で活動が確認できる計 63 団体を抽出している。NPO 法人シニア演劇ネットワークのウエッブサイトでは「全国のシニア劇団紹介[5]」として 28 団体が掲載されており，重複を除くと計 72 団体[6]に整理できる。シニア演劇 web は最近の情報更新が少なく，シニア演劇ネットワークは全国大会への参加意思や関心のある団体に限られるため，2020 年 3 月にインターネットと「朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアル」を改めて検索し[7]，30 団体（そのうち 19 団体は現在も活動）の情報を追加で確認した。これら計 102 団体について梶谷の整理[8]を参照し，活動を開始した年（設立年），創設主体（行政，市民，演劇人など），所在地，演劇指導者の有無，参加者の年代などを分かる範囲で整理した（表２（１），（２））。表中の出典欄は，「朝」＝シニア演劇 web，「梶」＝梶谷(2015)，「鯨」＝シニア演劇ネットワーク，「新」＝今回追加を示す。通し番号欄の網掛けは，最近４年間の活動が確認できなかった団体である。

シニア演劇の活動は福祉施設や学校などを訪問して上演するというように，限られた地域で特定の観客を対象とするボランティア団体も多く，インターネットや新聞などで広く情報提供しているとは限らないことが情報収集を通して示唆された。またカルチャーセンターや公民館・公立文化施設での高齢者向け演劇講座，民間の芸能プロダクションのシニア向けコースなどが，講座やクラスだけではなく公開の発表公演を行うことも多い。その修了生・卒業生が母体となって，自立して演劇活動を続ける事例も見受けられるが，こうした講座情報を網羅的に把握することは困難である。したがって，ひとまず収集した情報を整理したものの，これはシニア演劇の活動のごく一部に過ぎないと考えられる。

2. シニア演劇の現代的特徴

ここでは，表２および園部の分析を参照し，シニア演劇の特徴を整理する。園部は，高齢者による演

表２(1)　日本のシニア演劇活動団体

	出典	設立年	団体名	創設主体	指導者	所在地（県・市町村）		参加者年代・人数
1	新	1950年	じいちゃん劇団＊	市民		神奈川県	川崎市	
2	梶・朝	1973年	八老劇団	行政(老人福祉センター)		大阪府	八尾市	60歳以上
3	梶	1975年	おばあちゃん劇団「ほのお」	市民		静岡県	藤枝市	
4	新	1976年	シルバー劇団「みやこ」	市民	京都伸夫(脚本家)	兵庫県	宝塚市	60歳以上で結成
5	新	1980年	かまくら市民劇場	市民		神奈川県	鎌倉市	2005年現在で13人
6	梶	1987年	ぱっちゃま劇団	市民(高齢者学級)		富山県	高岡市	会員数 10人
7	新	1988年	シルバー演劇教室	行政(公民館)	劇団青年劇場の俳優	埼玉県	大宮市	81から50歳までの27人
8	梶	1991年	福祉劇団 鶴亀	市民		宮城県	柴田町	8人
9	新	1992年	糸貫町シルバー劇団	市民（老人クラブ）		岐阜県	糸貫町	69から81歳まで12人
10	新	1992年	つくし会	市民		埼玉県	荒川村	最高齢82歳、平均72歳(1994年)
11	梶/朝/鯨	1995年	シルバーボランティア劇団かがやき	市民(生涯学習センター)	ごとうてるよ(俳優・地元)	愛知県	名古屋市	55歳以上
12	新	1995年	本江かあちゃん劇団	市民(実年学級)		富山県	魚津市	
13	梶	1996年	芝居工房 来るくる座	市民		兵庫県	神戸市	55歳以上
14	梶・朝	1997年	楽塾	演劇人	流山児祥	東京都	新宿区	45歳以上
15	梶・朝	1998年	もりげき演劇アカデミー盛岡劇場	行政（文化施設）	浅沼久(演出・地元)	岩手県	盛岡市	おおむね60 歳以上
16	梶/朝/鯨	1999年	NPO法人発起塾(シニアミュージカル)	演劇人	秋山シュン太郎	大阪府(他5都市)		50歳以上
17	梶・朝	1999年	みちのく高齢者劇団交流事業	行政(文化施設)	中野健(劇団支木)	岩手県	西和賀町	60歳以上
18	新	1999年	むっぴー劇団	市民(婦人会)		佐賀県	佐賀市	平均年齢70歳
19	梶/朝/鯨	2000年	シルバーパンサー	市民(行政支援)	地元演劇関係	福岡県	福岡市	60歳以上平均年齢78歳(2019年)
20	新	2000年	素人ボランティア劇団尾上劇団	市民		埼玉県	越谷市	60代から80代
21	梶・朝	2001年	劇団・567倶楽部	演劇人	小林哲郎(地元劇団)	兵庫県	西宮市	50～70歳代
22	梶・朝	2001年	劇団あしたば	市民(公民館)	山崎三郎(地元劇団)	静岡県	静岡市	55歳以上
23	梶・鯨	2001年	河辺わさび座	市民		秋田県	秋田市	
24	新	2001年	シニア演劇企画集団「銀の会」	劇団	地元劇団	北海道	札幌市	60歳以上
25	新	2001年	名優座	演劇人	地元俳優	北海道	釧路市	55歳以上
26	梶	2002年	座・たくあん	市民(行政支援)		北海道	浦河町	
27	梶	2002年	劇団イースターズ／劇団はっぴーず	市民（行政設立・高齢者福祉）		兵庫県		
28	新	2002年	しあわせ劇団	行政	斎藤昭雄(地元俳優)	愛知県	東海市	
29	新	2002年	ババーズ	市民		福井県	美山町	平均年齢73歳
30	梶/朝/鯨	2003年	高齢協劇団 エルダーキャッツ	市民	大西恵(地元劇団)	香川県	高松市	55歳以上
31	梶	2003年	劇団「銀春座」	行政		大阪府	岸和田市	50歳以上
32	朝	2003年	劇団やんま	市民	地元劇団	宮城県	仙台市	平均70以上
33	鯨	2003年	明治座アートクリエイト	演劇人(プロダクション)	俳優など	東京都		
34	梶・朝	2004年	劇団「すずしろ」	市民(生涯学習センター)	倉田操（地元劇団）	大阪府	箕面市	60歳以上
35	梶・鯨	2004年	劇団笑劇	市民		青森県	おいらせ町	50歳以上
36	梶	2004年	NPO法人大正浪漫一座	市民		三重県	松坂市	62から86歳まで24人(2009年)
37	新	2004年	TOMORROW	演劇人	地元劇団	島根県	松江市	56-77歳の男女6人
38	梶・朝	2005年	演劇倶楽部『座』	演劇人	壌晴彦	東京都	新宿区	40歳以上
39	梶・朝	2005年	生駒市シニア劇団らくらく演劇塾	市民(コミュニティセンター)	杉本進、熊本一	奈良県	生駒市	
40	梶/朝/鯨	2006年	かんじゅく座	演劇人	鯨エマ	東京都	新宿区	60歳以上
41	梶・朝	2006年	A・SO・BO塾	演劇人	芹川藍	東京都		45歳以上 女性のみ
42	梶	2006年	さいたまゴールドシアター	演劇人(文化施設)	蜷川幸雄	埼玉県	さいたま市	55歳以上
43	梶・朝	2006年	金沢市民芸術村ドラマ工房 Ag クルー	行政(文化施設)	地元演劇人	石川県	金沢市	50歳以上
44	梶	2006年	シニア劇団のべおか笑銀座	市民(文化施設)	実広健士(地元劇団)	宮崎県	延岡市	50歳以上
45	梶/朝/鯨	2006年	釧路シニア劇団「南の風」	市民		北海道	釧路市	50歳位
46	梶・朝	2007年	トムスタジオ「45歳からのアクターズスタジオ」	演劇人	松本陽一	東京都	豊島区	45歳以上
47	梶・朝	2007年	坊っちゃん劇場 完熟「一期座」	演劇人	わらび座の俳優・演出家	愛媛県	東温市	40歳以上
48	梶・鯨	2007年	劇団かぶつ	市民		東京都	八丈島	60歳以上
49	梶/朝/鯨	2007年	アトリエ劇研シニア劇団	演劇人	細見佳代／田辺剛ほか	京都市／高槻市		50歳以上
50	梶	2007年	ミュージカル劇団ケセラ・セラ	市民(生涯学習)		京都府	京都市	
51	梶・朝	2008年	高齢者演劇集団チャレンジャー	市民	原田一雄	静岡県	富士市	55歳以上
52	梶	2008年	王子倶楽部	市民	高崎隆二(俳優)	神奈川県	相模原市	40歳以上
53	梶・朝	2008年	劇団キンダースペース シニアワークショップ	演劇人	キンダースペースの俳優・演出家	埼玉県	川口市	45歳以上

表２(2)　日本のシニア演劇活動団体（続き）

	出典	設立年	団体名	創設主体	指導者	所在地（県・市町村）		参加者年代・人数
54	梶	2008年	はつらつ健康劇団	市民(行政・健康指導)	なし	静岡県	下田市	65-80歳の女性9人
55	新	2008年	き楽座	市民	なし	東京都	あきる野市	
56	梶・朝	2009年	文学座プラチナクラス	演劇人(劇団)	文学座の俳優・演出家	東京都	新宿区	40歳以上
57	梶・鯨	2009年	幸齢者	市民		福井県	福井市	60歳以上
58	梶・鯨	2009年	かとれあproject	演劇人	大久保則子(俳優)	宮城県	仙台市	
59	梶	2009年	劇塾マデーラ	演劇人	浅香寿穂	徳島県	徳島市	
60	梶	2009年	SAGAパーフェクトシアター	演劇人	村井国夫、辻萬長	佐賀県	佐賀市	45歳以上
61	梶	2009年	TY Prime Company	演劇人	横内正	東京都	渋谷区	50歳～75歳まで
62	朝	2009年	遊快塾	演劇人	菅尾三恵子	静岡県	伊豆市	45歳以上
63	梶/朝/鯨	2010年	劇団大阪シニア演劇大学	演劇人	木津川計など	大阪府	大阪市	50歳以上
64	梶	2010年	高崎市市民演劇	行政		群馬県	高崎市	60歳以上
65	梶/朝/鯨	2010年	シニア劇団「満座楽(まんざら)」	市民(行政・介護予防)		宮城県	仙台市	60歳以上 平均69歳
66	梶・鯨	2010年	石見国くにびき18座	市民(高齢者大学)		島根県	浜田市	員12名
67	梶	2010年	NPO法人シニア劇団浪漫座	市民		静岡県	浜松市	55歳以上
68	新	2010年	赤坂着物笑劇団	市民		広島県	福山市	60―70代の15人で結成
69	鯨	2010年	劇団かっこん党	演劇人(文化施設)		福岡県	福岡市	50以上
70	梶/朝	2011年	シニアミュージカル劇団「一季」	演劇人	福本ひとし	東京都	新宿区	
71	梶/鯨	2011年	劇団 櫂人	演劇人		東京都	板橋区	
72	梶	2011年	劇団やんま	市民		宮城県	仙台市	
73	梶/朝/鯨	2011年	くしろ高齢者劇団	市民		北海道	釧路市	平均年齢は70歳を超える
74	梶	2011年	足利市民劇団 燦SAN	市民(文化施設)	加納朋之	栃木県	足利市	
75	新	2011年	富士川町さくら劇団	市民(行政支援)		山梨県	富士川町	平均年齢70歳の8人
76	梶/朝/鯨	2012年	劇研 GO！楽座(ごらくざ)	市民	雁坂彰	埼玉県	さいたま市	
77	梶	2012年	波瀾ばんばん座	市民		千葉県	市川市	60歳以上
78	梶・鯨	2012年	シニア劇団「おやくじら」	演劇人(プロダクション)	西城貴史	福岡県	福岡市	50歳以上
79	新	2012年	川西町フレンドリープラザ付属演劇学校シニア演劇コース	演劇人(文化施設)	河原俊雄	山形県	川西町	50歳以上
80	梶	2013年	シルバー劇団「子子孫孫」	演劇人	堤幸彦、多田木亮祐	愛知県	名古屋市	65歳以上
81	梶	2013年	南アルプス桃源座	市民(行政支援)	清野知之	山梨県	南アルプス市	50歳以上
82	梶	2013年	俳優大学	演劇人	日本映画大学	神奈川県	川崎市	50歳
83	新	2013年	うみねこ演劇塾　シニア塾	演劇人(公民館)	水木亮	青森県	八戸市	60歳以上
84	梶・鯨	2014年	BB☆GOLD	市民(行政支援)	佃典彦	愛知県	名古屋市	
85	梶	2014年	PPK48	市民	大川義行	千葉県	千葉市	50歳以上
86	梶・鯨	2014年	菜の花プラザシニア団	劇団(行政支援)	河原俊雄	山形県	川西町	
87	鯨	2014年	劇団ひとりっこ	市民	竹内典子	宮城県	仙台市	一人芝居・まんざら所属
88	新	2014年	oibokkeshi	演劇人	菅原直樹	岡山県	和気町	
89	新	2014年	銀のすず2号	演劇人	塩田真紀子	東京都	羽村市	
90	新	2015年	かたかご会	市民		静岡県	静岡市	60～80歳代
91	新	2015年	シニア歌舞伎塾	演劇人	菊月喜千寿	東京都	中央区	平均70歳　対象は55歳以上
92	新	2015年	豊麗線	演劇人	劇団大阪	大阪府	大阪市	
93	新	2015年	くるる即興劇団	演劇人		東京都	世田谷区	66歳～89歳
94	新	2016年	シニア演劇倶楽部うつろ座	演劇人	小熊ヒデジ	愛知県	名古屋市	50以上
95	新	2016年	65歳以上の劇団	演劇人	岡田美香	新潟県	三条市	
96	新	2016年	岸夢一座	市民		神奈川県	山北町	
97	鯨	2018年	表現集団ホワイト・モス	市民		東京都	伊豆大島	
98	新	2018年	ごくらくとんぼ座	演劇人	清水伸吾	大阪府	大阪市	50代～80代
99	新	2019年	綾瀬シニア劇団 もろみ糀座	行政	椎名泉水	神奈川県	綾瀬市	60歳以上
100	新	2019年	横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」	行政	横田和弘	神奈川県	横須賀市	
101	鯨	2019年	劇団サンシャイン	演劇人	原田一樹	埼玉県	川口市	50歳以上
102	新	2019年	TBスタジオ☆クラブ	演劇人	得丸伸二	東京都	北区	

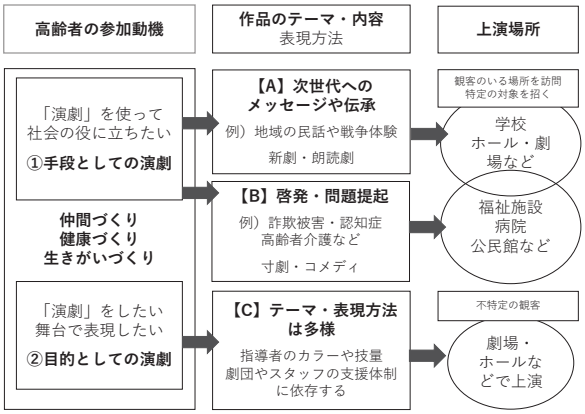
（筆者作成）

劇上演を取り上げた新聞記事の分析から，上演のねらいを以下の５つにまとめている[9]。

①健康づくり・関係づくり・生きがいづくり：1970年代半ばから現在までコンスタントに登場する。
②地域の文化・歴史を継承する，主張を後世に伝える：地域の民話や伝説，戦争体験をわかりやすく伝えるために，演劇という方法が取られている活動。
③高齢者による高齢者への働きかけ（励まし，元気づけ,啓発）:当事者同士だからこそ可能な関わり。
④高齢者の活力を引き出し，セカンドライフを充実させる：2006-07年を境に「シニア」という用語を用いる記事が増える。定年退職を迎えた団塊の世代の新たなチャレンジとして演劇活動が捉えられている。
⑤高齢者だからこそできる身体表現を追求する：上記④と同時に登場する。

⑤については,特に2006年は高齢者の演劇活動に関する記事が増加し，その６割が後述する演出家・蜷川幸雄による「さいたまゴールド・シアター」に関するものであり，その影響か2007年以降,「演じる高齢者」に関する記事そのものが増え，それ以前の記事と違って高齢者の身体とその「表現」にも目が向けられるようになったと指摘している。

園部が抽出した以上の５つのねらいと，梶谷が整理した創設の主体と動機をもとに，シニア演劇の類型化を試みたのが図１である。中高年になってから演劇を始めようとする場合，その動機としては社会貢献・社会参加のために「①演劇という形式を手段として何らかの目的を達成しよう」とする場合と，「②演劇そのものを目的とする」,つまり舞台に立ちたい，演劇表現を追求したいという動機のふたつの方向性がある。このふたつの方向に明確に分かれるとは限らないが，どちらの方向性に重きがあるかによって，演劇表現の方法が異なってくると考えられる。



（筆者作成）

図１ シニア演劇の類型

「仲間づくり」「健康づくり」「生きがいづくり」という動機は，手段としての演劇であれ，目的としての演劇であれ，どちらの場合であっても共通した動機であろう。演劇は身体を使ったグループ活動であり，人前で表現するのが必須の活動であるから，どんなシニア演劇においても,「健康づくり」や「仲間づくり」は，大なり小なりその活動プロセスで成果をもたらしていると思われる。

上演する演劇のテーマや伝えたい内容があらかじめはっきりしている場合が，図中の【A],【B】にあたる。【A】は,「地域に伝わる民話や伝説」,「戦争体験」を描き，地域文化の伝承や次世代へ平和や命の大切さといったメッセージを伝えるために，演劇という形式が用いられる。典型的な舞台表現として，群読やリーディング，あるいは，新劇的なリアリズムを目指す表現が考えられる。自治体などによる生涯学習事業である「高齢者大学」「高齢者学級」に参加し共に学んだ高齢者が，学習の成果を生かす場合や，講座修了後の発展的な活動として，このようなタイプのシニア劇団が設立される事例である。

また，高齢者による高齢者への働きかけとして，情報提供や高齢社会の課題などを，分かりやすく伝えようと，演劇という形式が取られる場合を【B】の「啓発・問題提起」というカテゴリーとした。高齢者を元気づけ，励まそうという目的で上演される。その内容は，オレオレ詐欺，介護保険制度の紹介，介護予防(かつてはボケ防止という言い方もあった),嫁姑問題，高齢者の孤独などが典型的な例として考えられ，分かりやすさ，伝わりやすさが肝要で，寸劇やコメディで表現される。社会福祉協議会や老人福祉センターなど高齢者福祉を推進する目的の組織や団体が母体となったり，敬老会や老人会など地域コミュニティの中の高齢者グループによって立ち上げられるような活動である。この場合，メッセージや情報を伝える対象ははっきりしており，劇団は地域の「ボランティア活動団体」として，福祉施設や公民館で高齢者向けに上演したり，福祉関係のイベント，地域や商店街の祭りなどで上演する機会がある。これら【A],【B】タイプのシニア演劇は，地域コミュニティや生涯学習グループといった，演劇

活動以前に醸成された仲間や関係性を基盤に始められる場合が多いと考えられる。

演劇表現そのものを目的に，高齢者の新しい挑戦として，また高齢者ならではの表現を目指して創設されるシニア演劇を，【C】タイプとした。表２をみると，2007 年以降に創設されたシニア劇団 63 のうち約半数の 31 団体は演劇人や劇団のイニシアチブで活動が始まっている。2005 年までに設立された団体 24 のうち，演劇人や劇団が創設のイニシアチブをとったのは８団体である。団塊の世代の定年退職による比較的元気な高齢人口の増加や，社会的に大きな反響をよんだ著名な演出家の実践が，演劇関係者にとっても，また中高年にとっても新たなチャレンジ分野として浮かび上がってきたことがうかがえる。演劇そのもの，舞台に立つことを目指した演劇表現追求型の活動が，最近のシニア演劇だと言えるだろう。そのため，確認できた劇団の多くが，演劇専門家の集積がある大都市部だということも指摘できる。47 都道府県の７割にあたる 34 都道府県に活動団体が確認でき，シニア演劇の活動は全国に広がってはいるものの，政令指定都市にある団体が 29，中核都市 21 団体，東京 23 区内 11 団体と，全体の６割以上は人口規模の大きな都市部での活動だ。

演劇人が主導するシニア演劇も詳細を見ていくと，公民館や生涯学習センターに演劇人自身が演劇講座の企画を持ち込んだもの，俳優や演出家など個人が創設したもの，ゆとりあるシニア層をターゲットに劇団の新規事業として始められたもの，テレビや CM に出演する俳優を育成する芸能事務所・プロダクションの事業と多様だ。参加者が演技を学ぶだけで最終発表は行わないもの，年度ごとに新しく参加者を募集するもの，固定した参加者で劇団として継続的に活動するもの，劇団組織が複数の地域で複数の演劇活動を広く展開するものなど，運営形態も様々である。

以上のように，高齢者による演劇活動は，中高年の生涯学習活動の一環として，また地域コミュニティにおける高齢者の社会参加や貢献意欲の発露として，多様な活動が全国各地で行われてきたが，演劇の専門家が参入して高齢者による演劇表現追求を目的とした活動の増加が近年の大きな特徴だといえる。

3. 高齢者の自主的な活動から生まれた演劇

演劇人によるシニア演劇の検討に入る前に，本項では，【A】，【B】タイプの活動を振り返っておく。老人クラブや生涯学習グループなどを母体にした高齢者の演劇活動は，演劇人が主導するシニア演劇と違い，大都市に限らず中山間地の自治体まで幅広い地域で活動例を確認できる。高齢者の生涯学習の場として，「高齢者教室」「高齢者学級」と呼ばれる講座が，文部省（当時）の補助事業創設により，1960 年代後半以降全国各地に広がる。文部省の補助事業がなくなった後も，自治体や財団などに引き継がれた事業もあり，「シニアカレッジ」「高齢者大学」など，様々な名称で現在も多様なプログラムが実施されている。この生涯学習の仲間を母体とした，シニア演劇の事例に，シニア演劇全国大会にも参加している「石見国くにびき 18（いちはち）座」がある。平均年齢 78 歳（2020 年 8 月），団員数 12 人のこの劇団は，島根県の高齢者大学校西部校（浜田市）[10] の社会文化科 18 期生が，卒業後の 2010 年に立ち上げた。ちなみに浜田市は島根県の西部にある人口約 52,000 人，高齢化率 36.9%（2020 年 9 月）の町である。団員には戦争の記憶や経験があり，「命の重さと平和の尊さ」を次世代に継承するという目的を掲げて演劇活動をしている。元小学校教諭のメンバーを中心にオリジナルの脚本を書き，学校行事や地域行事などで上演してきた。上演はリーディングや群読など朗読をベースにしており，演劇人の指導者はいない。筆者は 2018 年 9 月に島根県民会館中ホールで行われた「しまね演劇フェスティバル 2018　第 2 回しまね演劇コンクール」の上演『この道をつないで』を観劇したが，これもリーディングを中心にした舞台だった。朗読を主体とすれば，テキストを手に舞台に上がることができ，セリフ覚えの労力が軽減されるというメリットがある。シニア演劇における典型的な活動タイプの一例だ。

また，高齢者が高齢者のために演劇活動を立ち上げる【B】タイプの事例も全国各地にみられる。社会福祉協議会や高齢者施設からの発案に集う元気なシニアが，喜劇的な要素を交えてコントや寸劇で表現する。長年活動を継続して，全国的に知られるようになった劇団に八尾市の「八老劇団」がある。1979 年に活動が始まり，老人福祉センターが受け皿となっていることもあり，参加者が入れ替わりながら 40 年を超える活動歴を持つ。これまでにサントリー地域文化賞（2008 年）ほか様々な賞を受賞している[11]。高齢者施設，老人クラブ，地域のお祭り，学校での上演だけでなく，宝塚劇団を元にしたコメディ作品を八尾市の公立文化施設プリズムホールで上演するなど広く活躍している。

また，保健婦の大石さきが立ち上げた「おばあちゃん劇団ほのお」もよく知られている。大正 5 年生まれの大石が戦後，保健婦として静岡県藤枝市役所

に勤務，その頃からお年寄りの集まりで健康的な食事やカロリー計算などをわかりやすく伝えるために寸劇仕立てで説明していた。定年を迎える 1975 年（50 歳）頃から，健康や老いに対する不安や寂しさといったお年寄りの気持ちを多くの人と共有するにはお芝居がいいと考え，地域の女性民生委員らとひとり暮らしの高齢者をテーマにした演劇を始める。当初「ともしび」という名前でスタートし，1987 年より一層熱く燃えるよう「ほのお」と劇団を改名，大石を中心に，数名の「おばあちゃん」たちが加わり活動を続けてきた[12]。台本は大石が書き，登場人物は「痴呆が始まった母親」，「息子」，「嫁」，「近所の人」など定型で，配役も決まった人が演じる。福祉会館，公民館，小中学校，福祉や女性の大会などイベントのゲスト，敬老会の出し物などに呼ばれて上演，県外からも招かれ，2001 年には通算公演回数 707 回を数えた。平均年齢 80 歳以上のおばあちゃんだけの寸劇集団として広く知られるようになり，2003 年には『ぷりてぃ♡ウーマン』[13]として映画化もされている。大石は 100 歳を超えるまで「おばあちゃん」を演じ[14]，2019 年 3 月 103 歳で亡くなった。アマチュアの高齢者だけの活動が息長く続き人気を得た，象徴的とも言えるシニア演劇の事例である。

以上の演劇活動には，劇作家，俳優や演出家といった演劇の専門家が携わってはいない。舞台表現として洗練させることよりも，継承すべき明確なメッセージ，笑いとエネルギーで高齢者を励ますことが目的の演劇活動で，高齢者自身が自分たちで作り上げるものであった。

Ⅲ 演劇人が創設し運営するシニア劇団

本項では演劇人が主導するシニア演劇の活動について，演劇活動の進め方，作品の特色，演劇人と参加者の関係性などを検討する。演劇人が創設し 10 年以上の活動歴がある２事例，流山児祥による劇団「シアターRAKU」と鯨エマによる劇団「かんじゅく座」を取り上げる。

1. シニア演劇のイメージを裏切る：シアターＲＡＫＵ

シアターRAKU（2017 年までは「楽（らく）塾」）は，演出家・劇作家である流山児祥が 1997 年に立ち上げ，東京を拠点に活動し，地方や海外での上演も行っている。1947 年生まれの流山児は，1960 年代からアングラ演劇を代表する演劇人たちの薫陶を仰ぎ，1970 年に劇団「演劇団」を創設，1984 年からはプロデュース劇団「流山児★事務所（以降，事務所）」として様々な俳優と共同して舞台作品を発表するなど，俳優，演出家，プロデューサーと多面的な活動を展開してきた演劇人である。2020 年 9 月現在，一般社団法人日本演出者協会理事長を務めている。

流山児は 1997 年，45 歳以上を対象に募集した大人のための演劇ワークショップ「楽塾」を開講する。50 歳を前に，自分と同世代の「普通」の人たちと演劇活動をすることで，「町の中に普通に演劇がある」状態を作りたいと考えたこと，また脳梗塞で倒れた母親を当時 5 年ほど介護した経験から「老いた身体の有り様」に興味を覚えたことが発想の契機となった[15]。1997 年当時「45 歳」は，セカンドライフを考えるには十分な年齢と思われるが，「45 歳以上」のアマチュアを集める演劇活動はそれほど大きな関心を呼ばなかったようで，朝日新聞のデータベースでは創設時の記事は見つけられなかった[16]。女性４名，男性１名の計５名でスタートし，当時 42 歳[17]，45 歳，49 歳だった女性たちは，現在まで継続して参加している。日曜日１回の稽古で１年がかりで作品を作り上げる「緩やかな私塾」だったと流山児は振り返っている。一度上演をしてみたら面白い作品ができ，メンバーにまた来年もやろうと声をかけ，20 年以上も続いている[18]。

表３にこれまでの上演記録をまとめたが，1 年に１，２作品が定期的に上演されている。男性が少ないため，事務所の俳優や客演を招いたり，流山児自身が出演することもある。劇団員は，稽古場代として毎月 5,000 円を負担し，公演についてはチケットノルマを課すことで費用を捻出しており，公的な助成金は申請していない。公演は，事務所の稽古場「Space　早稲田」（80 席程度）が主に使われているが，10 周年公演は下北沢の「本多劇場」（380 席）で行われている。以降，拠点の Space 早稲田のほか，都内の劇場「座・高円寺」「ザ・スズナリ」「本多劇場」など，東京の小劇場界を代表・象徴する劇場で上演，また 2013 年にはカナダの演劇祭に参加，その後台湾でも上演と広く活動している。台湾公演を控えた 2017 年，「劇団としてのプライドを持って海外公演に臨むため」，シアターRAKU と名前を変更した[19]。2019 年時点で 19 名（女性 16，男性３名）規模の集団となり，最近は１公演あたり 2,000 人程度を集客する[20]。

上演には制作や舞台スタッフとして，事務所の若手メンバーがサポートに入るため，楽塾劇団員は上演に集中することができる。当初は劇団員も少なく，流山児が構成したオリジナル作品を中心に上演して

いたが，次第にシェイクスピア，寺山修司などの名作戯曲を用い，さらに歌や踊りといったミュージカル的なアレンジを加えている。シニア劇団というと，病院，老人ホーム，認知症，死後の世界など高齢者にとって切実と思われるテーマや舞台が取り上げられることが多い。それに対し，シアターRAKUは，「ひとは元気で楽しいものを見ると元気で楽しくなる」をモットーに，流山児の演劇的バックグラウンドと個性が反映された活力に満ちた舞台であるところが特徴的だ。日常とは異なるシェイクスピアや寺山修司の世界をミュージカル仕立てにした作品は，「明るくて楽しい」「派手な衣装で楽しい」舞台[21]で観客を飽きさせず，舞台に立つ劇団員にも大きな刺激となっている。流山児は全員をキャスティングした上で，全員をいい役にしてあげる必要があると語る[22]。プロを目指す演劇活動ではないアマチュアの活動であるからこそ，参加するモチベーションを継続させること，劇団員ひとりひとりの姿を見せることがシニア演劇の重要なところだ。中高年のアマチュアについて流山児は，「歴史の染み付いた，濃くて温度のあ

表３　シアターRAKU（楽塾）公演一覧

公演年月	公演名	原作他(演出は全て流山児祥)	シニア出演者	その他出演者・備考
1998年3月	第一回公演『水色の雨』	【構成・美術・音響】流山児祥	杉山智子 いそちゆき 小森昌子 めぐろあや 川上アキラ	佐藤和子(流山児組) 甲津拓平(流山児★事務所)
1999年2月	第二回公演『かもめが翔んだ』	【構成・音響】流山児祥	めぐろあや 杉山智子 小森昌子 いそちゆき	佐藤和子(流山児組) 甲津拓平(流山児★事務所)
1999年9月	第三回公演『Tokyo BLUES～愛と官能の日々～』	【構成】流山児祥	めぐろあや 杉山智子 小森昌子 いそちゆき	佐々木想(流山児組) 甲津拓平(流山児★事務所)
2000年3月	第四回公演『さよならの向こう側～流山児版「桜の園」～』	【台本】流山児祥	いそちゆき 小森昌子 杉山智子 内藤美津枝 めぐろあや	イワヲ 甲津拓平 畝部七歩(流山児★事務所) 佐々木想(流山児組)
2001年3月	第五回公演『雨に咲く花』	【作】金杉忠男「花の寺」 【構成】流山児祥	いそちゆき 小森昌子 杉山智子 内藤美津枝 めぐろあや 奥村季久	イワヲ 甲津拓平 畝部七歩(流山児★事務所)
2001年8月	楽塾2001夏の発表会・新人お披露目『愛して頂戴』	【作】竹内銃一郎「伝染」+「あたま山心心中」より	伊藤しずよ 奥村季久 川本かず子 桐原三枝 小森昌子 杉山智子 高野あっこ 遠山晴美 二階堂まり めぐろあや	**＊参加者新規募集を行った**
2002年4月	楽塾5周年記念公演『楽塾版ベルサイユのバラ★黄昏のビギン』	【原作】高取英「G線上のアリア～フランス革命異聞～」より	いそちゆき 伊藤しずよ 奥村季久 川本かず子 桐原三枝 小森昌子 杉山智子 高野あっこ 遠山晴美 内藤美津枝 二階堂まり	イワヲ 甲津拓平 畝部七歩(流山児★事務所)
2002年9月	楽塾2002秋の特別公演 『楽塾歌劇★星の王子さま』	【作】寺山修司	いそちゆき 伊藤しずよ 川本かず子 小森昌子 杉山智子 高野あっこ 遠山晴美 内藤美津枝 二階堂まり めぐろあや	冨澤力 柏倉太郎 木暮拓矢(流山児★事務所)
2003年5月	楽塾創立6周年記念公演『楽屋』	【作】清水邦夫	小森昌子 杉山智子 内藤美津枝 めぐろあや	冨澤力 柏倉太郎 (流山児★事務所)
2003年5月	楽塾 創立6周年記念公演 『楽塾歌劇★女たちの桜の園』	【台本・演出】流山児祥	いそちゆき 伊藤しずよ 川本かず子 桐原三枝 高野あっこ 遠山晴美 二階堂まり他	冨澤力 柏倉太郎 (流山児★事務所)
2004年4月	楽塾創立7周年記念公演 『楽塾歌劇★碧い彗星の一夜』	【作】北村想 【構成演出】流山児祥	いそちゆき 伊藤しずよ 川本かず子 桐原三枝 小森雅子 杉山智子 高野あっこ 遠山晴美 内藤美津枝 二階堂まり めぐろあや他	冨澤力 柏倉太郎 木暮拓矢(流山児★事務所)
2004年8月	楽塾2004年夏の発表会 『夏の夜の夢ダイジェスト版』	【作】W・シェイクスピア(松岡和子訳) 【構成・演出】楽塾	[パフォーマンス組]:杉山智子・いそちゆき・川本かず子・遠山晴美・高野あっこ 内藤美津枝・菊池麿菜 [時代劇組]:めぐろあや・二階堂まり・桐原三枝・小森雅子 宮沢智子・関口有子・西川みち子	
2005年4月	楽塾創立8周年記念公演 『楽塾歌劇★真夏の夜の夢』	【原作】W.シェークスピア 【翻案】野田秀樹 【構成・演出】流山児祥	いそちゆき 伊藤しずよ 川本かず子 菊池麿菜 桐原三枝 小森雅子 杉山智子 関口有子 高野あっこ 遠山晴美 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 宮沢智子 めぐろあや	冨澤力 柏倉太郎 木暮拓矢(流山児★事務所) **＊05年までに10人が入団**
2006年4月	楽塾創立9周年記念公演 『楽塾版☆十二夜』	【原作】シェークスピア(松岡和子訳) 【翻案・台本・演出】流山児祥	いそちゆき　伊藤しずよ 川本かず子 桐原三枝 菊池麿菜 小森雅子 杉山智子 関口有子 高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 めぐろあや	冨澤力　柏倉太郎 木暮拓矢(流山児★事務所) **＊本多劇場、滋賀県でも上演**
2007年5月	楽塾創立10周年記念公演 『楽塾歌劇★真夏の夜の夢』	【原作】W.シェークスピア 【翻案】野田秀樹 【構成・演出】流山児祥	いそちゆき 伊藤しずよ 川本かず子 菊池麿菜 桐原三枝 小森雅子 杉山智子 高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 宮沢智子 めぐろあや	柏倉太郎・木暮拓矢・武田智弘・諏訪創　(流山児★事務所)
2008年4月	楽塾創立11周年記念公演 『ぜ～んぶ書きかえたロール・プレイン・ザ・バグ』	【作】北村想 【演出】流山児祥	いそちゆき 川本かず子　菊池麿菜　桐原三枝 小森昌子 杉山智子 高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 めぐろあや	肝付兼太(声の出演)　流山児祥
2008年12月	【楽塾08クリスマス発表会・Space早稲田上演！】『楽塾歌劇☆十二夜』	【原作】W・シェイクスピア 【台本・演出】流山児祥	いそちゆき・めぐろあや・小森昌子・杉山智子・二階堂まり・桐原三枝・高野あっこ 川本かず子、他新人。	
2009年8月	楽塾創立12周年記念 『めんどなさいばん』	【作】北村想 【演出】流山児祥	いそちゆき　河内千春　川本かず子　菊池麿菜　桐原三枝 小森昌子　阪口美由紀 杉山智子　関口有子　高野あっこ 多良間通朗　内藤美津枝　習志野大吾　二階堂まり 西川みち子 みかわななえ　宮沢智子　村田泉　めぐろあや　吉田和子	**＊北村想書き下ろし作品** **＊ザ・スズナリで上演**
2010年4月	楽塾創立13周年記念 『ほろほろと、海賊』	【作】佃典彦 【演出】流山児祥	いそちゆき　河内千春　川本かず子　桐原三枝　小森昌子　阪口美由紀　杉山智子 関口有子　高野あっこ　多良間通朗　内藤美津枝　習志野大吾　二階堂まり 西川みちこ　みかわななえ　村田泉　めぐろあや	
2011年4月	楽塾創立14周年記念公演　『～宇宙下町大戦争の巻～も一れっア太郎』	【原作】赤塚不二夫 【作】佃典彦【演出】流山児祥	いそちゆき 河内千春 川本かず子 桐原三枝 小森昌子 阪口美由紀 杉山智子 関口有子 高野あっこ 多良間通朗 内藤美津枝 二階堂まり 西川みちこ みかわななえ　宮沢智子 めぐろあや	肝付兼太(特別出演) 流山児祥　柏倉太郎　山下直哉
2012年5月	楽塾創立15周年記念公演 楽塾☆歌舞伎『十二夜』	【原作】W.シェイクスピア 【台本・演出】流山児祥	いそちゆき 河内千春 川本かず子　菊池麿菜　桐原三枝 小森昌子 阪口美由紀 杉山智子 関口有子　高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 西川みちこ みかわななえ 宮沢智子　村田泉 めぐろあや　吉田和子	山下直哉・五島三四郎(流山児★事務所) **＊座・高円寺2で上演**
2013年7月	楽塾創立16周年記念公演　楽塾☆歌舞伎『十二夜』FRINGE FESバージョン	【原作】W.シェイクスピア 【台本・演出】流山児祥	川本かず子　桐原三枝　阪口美由紀　杉山智子　関口有子　高野あっこ　内藤美津枝 二階堂まり　西川みち子 みかわななえ 村田泉　めぐろあや	甲津拓平　五島三四郎(流山児★事務所) **＊8月にカナダ・ビクトリアで上演**
2014年4月	楽塾創立17周年記念公演　寺山修司の『女の平和』～不思議な国のエロス～	【作】寺山修司(未上演戯曲・世界初演)【構成・演出】流山児祥	いそちゆき 川本かず子 桐原三枝 河内千春 小森昌子 阪口美由紀　杉山智子 関口有子 高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 みかわななえ 宮沢智子 村田泉 めぐろあや	ラビオリ土屋、後藤英樹、柏倉太郎、五島三四郎、山下修吾／流山児祥　**＊仙台で上演**
2015年5月	楽塾創立18周年記念公演 『寺山歌劇☆くるみ割り人形』	【作】寺山修司 【構成・演出】 流山児祥	いそちゆき 河内千春 川本かず子 桐原三枝 阪口美由紀 杉山智子 関口有子 高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 みかわななえ 宮沢智子 村田泉 めぐろあや	ラビオリ土屋　後藤英樹　柏倉太郎　森諒介 流山児祥　**＊座・高円寺2で上演**
2016年4月	楽塾創立19周年記念　台湾国家戯劇院 新點子演劇祭 招聘公演 『女人的和平』	【作】寺山修司　【演出】流山児祥 【振付】北村真実 【音楽監督】関口有子	いそちゆき 川本かず子 桐原三枝 河内千春 阪口美由紀 杉山智子 関口有子 高野あっこ 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 みかわななえ 宮沢智子 村田泉 めぐろあや 辻洋子 平山郁子 溝田勉 酒巻ジョン	ラビオリ土屋、後藤英樹、流山児祥 **＊台湾国家両庁院(国立劇場)**
2017年5月	楽塾 創立20周年記念公演 『すももももも もものうち』	【作】佃典彦　【演出】流山児祥 【音楽】多良間通朗	いそちゆき 河内千春 川本かず子 桐原三枝 阪口美由紀 佐野眞一 関口有子 高野あっこ　辻洋子 内藤美津枝 二階堂まり 西川みち子 平山郁子 みかわななえ 村田泉 めぐろあや	流山児祥 柏倉太郎 山下直哉 森諒介 星美咲 橋口佳奈 竹本優希　**＊佃典彦書き下ろし**
2018年4月	シアターRAKU公演 『RAKU歌舞伎☆十二夜』	【原作】W.シェイクスピア 【台本・演出】流山児祥	いそちゆき 川本かず子 河内千春 桐原三枝 佐野眞一 杉山智子 関口有子 高野あっこ 辻洋子 中尾レイ 二階堂まり 原きよ 平山郁子 溝田勉 めぐろあや	ラビオリ土屋 **＊三重県、台湾(高雄)で上演**
2019年5月	シアターRAKU公演 『女の平和～不思議な国のエロス～』	【原作】寺山修司～アリストパネス「女の平和」～ 【台本・演出】流山児祥	いそちゆき 小野田大介 川本かず子 桐原三枝 佐野眞一 杉山智子 関口有子 高野あっこ 辻洋子 内藤美津枝 中尾レイ 永田たみ子 二階堂まり 西川みち子 原きよ 平山郁子 溝田勉 めぐろあや 村田泉	ラビオリ土屋、後藤英樹、橋口佳奈 流山児祥　**＊本多劇場で上演**

（公式ホームページより筆者作成）

る体が面白い」[23]と語り，演劇を継続してきたことで劇団員に強さと個性が出てきたと変化を指摘する。流山児のシニア演劇では，高齢者に限定したテーマや舞台ではなく，彼のアングラ演劇的な表現や手法が舞台を彩る。デフォルメされた表現，歌と踊りが，「高齢者」演劇へのイメージを裏切るものとなっている。

そもそも劇団による演劇活動そのものが経済的に成立しにくい状況において，このようにシニア劇団の活動が徐々に発展し，20年以上持続しているのは，稀有な事例と言ってよい。流山児の指導者・演出家としての吸引力と魅力，参加者に与える満足感と達成感は，流山児自身が長年にわたり培ってきた人脈とプロデュース力，また基盤となるマネジメント力によって維持されてきたと考えられる。また，45歳以上という，比較的若い年代のシニアが参加できたことから，アマチュアとはいえ早くから演劇のための訓練が可能で，流山児の演劇観に即した作品づくりへとつながっている。だとすれば，20年を超えた今後の継続は，現在73歳の流山児自身の高齢化と劇団員の高齢化が，作品づくりと劇団運営にどのように関わってくるのかが鍵となるだろう。

2. 若手演劇人が率いるシニア劇団：かんじゅく座

「かんじゅく座」は，60歳以上の人を対象とするシニア劇団として，1973年生まれの鯨エマが創設した。鯨は，創設時33歳の若さである。発端は，小劇場の活動をより広くシニア世代にも広める方法として，また舞台役者にとって食べていくひとつの手段という発想だった[24]。シアターRAKUが，実績を確立した演劇人による演劇的試みであったとすれば，かんじゅく座は一般的には無名の若手演劇人による新たな事業の開拓としてスタートした。

鯨は舞台俳優を志し，劇団昴の養成所を経て劇団青年座に所属，在団中にプロデュース劇団海千山千を立ち上げ，演劇上演を行ってきた。青年座には6年所属し２作品しか役がつかなかった「使えない役者」と自嘲気味に語るが，自ら作・演出・出演する舞台を上演するほか，ドキュメンタリー映画の製作と活動の幅は広い。また，役者だけでは食べていけないとヘルパーの資格を取得し，身体障害者の介護をするうち，音声ガイドなどの障害者支援も行うようになり劇場のバリアフリー化への関心を高めていく。高齢者が劇場に足を運ぶ方法を考える中で，むしろ高齢者が舞台に立つ方に需要があるのではという発想に至る。現在も，俳優事務所に所属し映画やテレビ出演など自身の俳優としての活動も継続しながら，シニア劇団「かんじゅく座」の定期公演と出張公演，NPO法人シニア演劇ネットワーク代表として全国シニア演劇大会を実施するなど，実にパワフルに活動を展開している。

鯨は2006年に60歳以上の劇団参加者を募集，８月に初めての体験レッスンを開講した。４日間のレッスンには延べ30人程度が参加，そこに集まった初心者ばかり13人の座員でかんじゅく座が９月からスタートした。鯨の演劇仲間らも指導に参加し，7ヶ月後の2007年3月，鯨作『赤い川の谷間』の上演で旗揚げする。参加した座員の達成感は大きく，続けたいと希望する人も多かった。また何より鯨自身が，上演に対する座員と観客からの反応の大きさに感銘を受け，劇団の継続を決意する。その後，毎年春は鯨による脚本で劇場公演，秋には小作品を持って，新宿区の保育園や児童館，高齢者施設，障害者施設などを訪問し上演している。

2009年には座員が40人まで増え，２チーム体制となる。週２回みっちり稽古重ねるチームと，仕事や介護を抱えている人向けの週１回チームに分かれている。2013年には，週２回と週１回の稽古を行う演劇クラス，週１回の朗読クラスの３チーム体制へと拡大する[25]。2018年５月公演の時点で，創設メンバー13人のうち５人が継続参加している。最高齢は81歳，70代が最も多く，３分の２が女性である。東京は交通の便も良く，千葉県大網，神奈川県横浜市・大磯町，埼玉県所沢市など，東京を含め関東各地から座員は稽古に通っている。

稽古は平日の午前10時から13時に，鯨が借りている新宿の稽古場で行われ，終わると座員は都心でランチとおしゃべりを楽しんで帰途につく。稽古週２回チームでは，鯨による指導のほか専門講師を招いた歌やムーヴメント，インプロなどの稽古が行われることもある。年会費は一律5,000円だが，月謝は稽古頻度と座員の年齢によって異なり，60代週２回稽古の場合が最も高く月13,000円，80代以上は稽古日数にかかわらず月5,000円と，座員の状況を見ながら毎年決めているという。月謝を全額払うのが難しいという場合には，劇団維持に必要な仕事の手伝いを任せるなど柔軟に対応している。演劇集団としてのまとまりの醸成が，作品の質にも深く関わってくるため，座員の継続参加への配慮は肝要だ。毎回の上演を満席にして，１公演の総観客数を千人まで確保できれば，助成金なしでもやっていけるというが，2018年の時点では１公演でチケット販売枚数700人ということだった。

鯨が，脚本・演出・企画プロデュース全てを担っている。脚本は鯨の書き下ろしオリジナルで，現代社会の中で議論したいこと，伝えたいことを軸にテーマを決めている。例えば，「子どもや孫の未来に残したい世界とは？」という観点から自衛隊にシニア部ができたという設定の『ぼくらの未来』(2015年)，非正規雇用の人たちが自ら立ち上がる姿を描く『ちいさなお店』(2014年)，18歳選挙権・選挙戦の裏側を描く『カラスの声もしわがれる』(2016年)，過疎・耕作放棄地などが素材として取り上げられる『みのりの畑』(2018年) などの作品がある。座員らシニアの気持ちや意見を聞き取り反映させて書く。当て書きが基本だが，いかにもその人らしい役をあてるだけでなく，本人とはかけ離れた役を当てる場合もある。また身体的な状況に配慮しセリフを少なくしたり，介護中の家族や座員自身の体調不良などを踏まえて予めダブルキャストにするなど，高齢者ならではのリスクを想定した配役と脚本を工夫している。やはりアマチュアの場合，座員全員に出番と見どころを作るのが肝要という。それが，座員にとって参加継続のモチベーションのひとつとなるからだ。

作品テーマに合わせ，座員とともに現場で学ぶ機会を鯨が設けているのは興味深い。新宿でホームレスを観察したり，実際に畑で農作業をしてみたりといった具合である。役作りに活かすという考えだと思われるが，役柄やテーマについて座員の意向と必ずしも合致しないこともあるらしく，こうしたフィールドワークが緊張関係をほぐしたり，相互の信頼関係を築く機会となっているのかもしれない。劇団内の相互理解を深め，座員のモチベーションを維持・向上させるために，鯨は脚本以外にも様々な試みを実践してきた。例えば，春の定期公演の他に秋は，朗読や小作品で施設を訪問する出前公演をボランティアで実施しており，これは座員にとって社会貢献という張り合いをもたらしている。児童施設での公演は子どもの率直な反応が，座員にはスキルアップにもつながる。また，2018年には拠点以外での上演の機会として東京の島嶼部（大島，八丈島）で，現地の高齢者劇団との交流公演を行った。そもそも，全国シニア演劇大会の開催も，座員が同世代の人たちと交流することで，相互に勇気を与えられるだろうと，他劇団との合同公演を鯨が企画したことがきっかけだ。

鯨は，高齢者にとって「シニア劇団に参加することのメリットは，ひとつの目標に向かうたくさんの仲間が一気にでき，仲間づくりと生きがいづくりが同時にできることだ」が，しかし「舞台に立つ中で，演劇を通じて大きく変化していく自分自身を楽しむことができなければ長続きしない」と演劇表現のエッセンスを語る。中高年ともなれば，すでに自己像は確立している。そこから離れて変化や新しい自分との出会いを戸惑いつつも楽しく受け止めることができれば，その人にとって歳を取ってからの演劇活動は意義あるものとなるだろう。鯨は自身の経験から，参加するシニアが舞台に立って客席からの拍手喝采を浴びる体験をするうちに，鯨の演技指導の意味を理解するようになり，親子以上に年の離れた座員との間の信頼関係を築くことができたという実感があるという。すでに演劇界での地位や評価を獲得した上で，同世代との舞台を作る流山児や蜷川とは異なる苦労があるものと思われる。メンバーがひとりでも入れ替わると，劇団の雰囲気や関係性を新たに作り上げていくこととなるため，最初からなんらかの枠にはめるのはなく，参加者の個性を見ながら，その時のメンバーでできる演劇を考えていく，というのがシニア劇団に対する鯨のスタンスだ。

かんじゅく座参加資格は，年齢60歳以上，自力で稽古場に来ること，そして公演の掛け持ちをしないことだった。しかし，活動歴が長くなり，劇団としてのまとまりは醸成されつつあるものの，座員も年齢を重ね新たな課題が生まれている。2018年，鯨は春の定期公演で初めて舞台裏でプロンプターを務めることになった。座員に，軽い認知症が疑われる症候が見られるようになったためである。活動歴が長い座員が増えるにつれ生まれる，身体的，あるいは経済的変化にどう対応していくか。アマチュア劇団であるからこそ，座員ひとりひとりの生活や家族を第一にしたいという鯨は，継続の意思がある座員を高齢化による問題で排除したくないと考えている。歳をとって演劇が難しくなったら退団，ではシニア劇団の看板を掲げる意味は薄れる。今後は，高齢者介護や医療の専門家との連携を積極的に進める，シニア演劇を支える新たな仕組みを構築する，といった展開が求められ，そのためにはシニア劇団の外部や地域コミュニティとのつながりや柔軟な連携が必要になるものと思われる。

Ⅳ．公立文化施設におけるシニア演劇

ここでは公立文化施設で実施された対照的な2事例，「さいたまゴールド・シアター」と岩手県西和賀町の高齢者演劇事業を取り上げる。どちらも，公立文化施設の自主事業として10年以上継続したシニア演劇だが，前者が演出家のイニシアチブによって，

新たな表現を追求する演劇活動だったとすれば，後者は演劇活動を手段として高齢者福祉の向上と地域間交流の促進を目的とした活動である。後者にも演劇人は携わっており，複数組織の柔軟な連携によって可能になった活動であり，これらの成果と課題は，超高齢社会において公立文化施設が取り組むシニア演劇の手がかりを提示すると考える。

1. 高齢者による演劇の芸術性を追求する：さいたまゴールド・シアター

さいたまゴールド・シアター（以降，ゴールド）は，国際的に活躍する演出家蜷川幸雄（1935 年生れ–2016 年没）が 2005 年に，彩の国さいたま芸術劇場（埼玉県立の文化施設。以降，芸術劇場）の芸術監督に就任したことが契機となって創設された。著名な演出家が，素人の高齢者を相手に本格的な演劇を作るということで，広く注目を集めるとともに，各地のシニア劇団の創設に影響を与えたと言われる[26]。多くの中高年に舞台に立つ夢を思い出させ，劇団や演劇講座の扉を叩くという具体的な行動の後押しになったに違いない。鯨も，自身の体験レッスンの参加者に，蜷川のオーディションを受けるには気後れがしたとか，オーディションに落ちたという人がいたと証言する。ゴールドの活動については関連書籍も複数刊行されており[27]，新聞，テレビ，インターネットなど数多くの媒体に記事もあるので，後の議論に必要な概略の紹介とする。

2006 年に，55 歳以上，経験・居住地不問で公募したところ，20 名の募集枠に対し，蜷川や主催者側の予想をはるかに上回る 1,266 人もの応募があった。1,011 人がオーディションを受け，15 日間をかけて最終的に 55 歳から 80 歳までの 48 人が選ばれ，辞退者 1 名を除いた 47 名，平均年齢 66．5 歳による演劇活動が始まる。当時 70 歳の蜷川は，自身の年齢も重ね合わせながら，次のように語っている。

「年齢を重ねるということは，様々な経験を，つまり深い喜びや悲しみや平穏な日々を生き抜いてきたということの証でもあります。その年齢を重ねた人々が，その個人史をベースに，身体表現という方法によって新しい自分に出会うことは可能ではないか？ということが，私が高齢者の演劇集団を創ろうと思った動機です。」[28]

メンバーは 2006 年 5 月から，1 日 4 時間，週 5 日間にわたり，発声，ダンス，ムーブメント，日本舞踊などをそれぞれプロの講師から学び，基礎から俳優訓練を受けた。2006 年度中に 2 度の中間発表を行い，2007 年 6 月に第 1 回目の上演を行った。劇作家岩松了が，ゴールドのために書き下ろした新作『船上のピクニック』である。以来，現代日本の演劇を牽引する劇作家の書き下ろし新作を中心に，拠点の芸術劇場での上演のほか，県外や海外（パリ，香港，ルーマニアなど）での上演も果たしている。古典名作戯曲ではなく，新作書き下ろしを主に上演することについて，蜷川は「高齢者に未来や未知の世界を体験してほしいから」と語っているが[29]，高齢者がその個性の染み付いた身体で舞台に立ち，本来の年齢とは差が大きい若者の役をあえて演じるというのは，演出家が求めるリアルな表現ではなかったのだろう。高齢者ばかりが出演し，なおかつ現代的な面白さのある戯曲が，蜷川のゴールドには必要だった。

参加者のプロフィールは多様で，若い頃に演劇経験がある人もいたが，多くは経験のない人たちである。参加者は人生後半の時間を「世界の蜷川」に賭けようと，県域を超えて集まった。劇場の自主事業予算，蜷川の作品創造を支えてきたプロのスタッフ，そして蜷川が若い俳優育成のために同じく芸術劇場で立ち上げた「ネクスト・シアター」メンバーによるサポートや協働といった充実した環境の中で，ゴールドの活動は躍進していった。メンバーの中には，ゴールドでの経験を生かし，他の劇団やプロデュース公演での客演や，蜷川の他作品への出演，テレビ CM への出演など活動を広げた人もいる[30]。

2016 年の蜷川没後，芸術劇場はゴールドの遺産を継承し「演劇で，多様な人々の包摂を目指す。芸術文化で社会課題を解決するのは公共劇場の役割」[31]と，劇団を存続させることを決め，複数の演出家によって年に 1 回程度の公演が行ってきた[32]。しかし，当初の設立経緯や，蜷川の指導を受けた劇団員という性格上，新規の募集は行っておらず，また病気や死亡といった理由で 2018 年時点メンバーは，67 歳から 92 歳までの 36 名に減っている。

芸術劇場は新たな事業として，より多くの高齢者が参加できるように，60 歳以上を対象とし表現活動に親しむ芸術クラブ活動「ゴールド・アーツ・クラブ」を立ち上げ，2018 年には数百人が参加するパフォーマンスの上演を行った[33]。またアマチュアの高齢者による海外の舞台作品も招き，2017 年に 9 月に「世界ゴールド祭　キックオフ！」として 4 日間にわたり，イギリスにおける高齢者による演劇活動の事例紹介やダンス・ワークショップ，シンポジウムを実施した。その成果を踏まえ翌年の「世界ゴールド祭　2018」では，世界各地の高齢者による演劇やダンスなどの作品上演，国内の委嘱作品，それらを主宰する劇場，アーティスト，プロデューサーらの

シンポジウムをプログラムした高齢者の国際舞台芸術祭を開催し，ゴールドの演劇活動をより広がりのある活動へと発展させようとしている。

ゴールドは，すでに多くの業績を重ねた演出家による新たな演劇的挑戦であった。その挑戦は，自治体が支える潤沢な経済的・環境的支援によって，全国各地から情熱のある高齢者を集めることにつながり，社会的関心を喚起しシニア演劇という可能性を開いた。蜷川という著名な演出家が率いたことによって，中高年のアマチュアと演劇の専門家，双方の関心を大きく高めたと言える。日本の公立文化施設では，このように特定のメンバーが継続して演劇活動を行うレジデントシアターというあり方は，年齢やジャンル，プロかアマかに限らず特殊な事例にとどまっている。しかし彩の国さいたま芸術劇場のように，シニア演劇の継続的な活動はそれを核に，多様な世代の演劇活動者の育成，新たな劇場利用者や観客の創造，これまで文化施設では連携の少なかった地域福祉分野との協働，さらには国際的な連携など，超高齢社会を突き進む地域の公立文化施設にとって，広がりや公共性を生み出す大きな可能性のある活動であると考えられる。そのような観点からみればゴールドは，地域の公共劇場の使命を果たすための事業としてひとつの参照項となりうる。

また，高齢者と作る舞台表現の固有性について蜷川はゴールド立ち上げ3年後に，次のように語っている[34]。「忘れる，突然思い出す，表現が一定しない・・・年寄りに起こることは，そのまま舞台で起こることだと考えて，何が起こってもいいようにあらゆる手当をしている。74歳の人生に起こることは何でも受け入れる体制で 芝居をお客さんの前にもっていく。そのことを許容されない限り，その芝居は演劇と呼べないわけです」。しかし実際のゴールドによる舞台作品は，メンバーにはプロンプがつき，それぞれが決められたセリフを話し，決められた役割を演じて，演出家が全体を構築するという演劇形式を踏襲する上演から大きく離れることはなかった。昨日できたことが，今日できるとは限らない「老い」の現実とともに，どのような舞台表現が可能なのか，ということは演劇人にとって，大いに挑戦の余地がある分野ではないだろうか。

2. 演劇をツールに：西和賀町文化創造館のシニア演劇

岩手県にある「西和賀町文化創造館銀河ホール」（以降，銀河ホール）の高齢者による演劇は，地域密着型の特色ある演劇事業として，やはり多数の新聞記事，雑誌特集記事，文化政策レポート[35]などで取り上げられてきた。高齢者の健康・生きがいづくりからさらに地域間交流という目的のために，演劇活動を工夫に満ち活用した事例である。そこにも地域の演劇人や文化環境が大きな貢献を果たしている[36]。

銀河ホールは，1993年に岩手県旧湯田町に開館した客席数338の演劇専用ホールである[37]。日本有数の豪雪地帯，人口約5400（2020年9月）人の町の施設だが，特徴的な形の建物と暖かみのあるホール内部，地域演劇祭から国際的な演劇活動まで独自の自主事業展開で知られる。また旧湯田町出身の川村光夫らが1950年に創設した劇団「ぶどう座」が，地域に根差した劇団として60年を超える息の長い活動をしており，千田是也や木下順二といった日本の演劇界の中心的人物や劇団と川村

表4　西和賀町シニア演劇　公演一覧

事業年	劇団名	作品名	原作	その他（参加者年齢・人数など）
1999年	ゆうゆう座	二十二夜待ち	木下順二	64−86歳14人　平均年齢72歳
2000年	よつば座	植物医師	宮澤賢治	5回　65−81歳16人 菅原信夫町長73歳も村長役で出演
2001年	雪渡りの一座	雪渡り	宮沢賢治	4回 障害者(23、25歳)が参加 60−81歳　11人　入場協力金300円
2002年	きらら座	瓜子姫とアマンジャク	木下順二	7回　平均年齢71歳　61−82歳　13人
2003年	ほのぼの劇団	むかーし・むかしの桃太郎	中野健	6回　67−84歳　平均73歳　13人
2004年	あさひ座	かっけんころころ雉の声	川村光男	6回　57−81歳　14人
2005年	町村合併で休止			
2006年	座・さんらいず	歌入り芝居　沢のカラさわぎ	高橋豊平	5回　65-84歳　15人
2007年	優夢座	オールドボーイズがやってきた・山に幸あり－唄う直売所	高橋純	4回　66-82歳　14人平均73歳 (横手市教育委員会職員)書き下ろし
2008年	ゆきんこ座	おゆき	篠崎淳之介	6回　61−77歳　平均70歳　14人　入場無料
2009年	元気座	いってらっしゃい、気をつけて	高橋純	3回　18人
2010年	平和座	七人の桜井	金子義広	劇団前進座作家　東京公演実施
2011年	ふきのとう	にわか仕立て　唄う狸御殿	高橋純	60−80代　10人　平均年齢67歳 被災地・大船渡市で上演
2012年	ぎんが	さよならニッポン　ごきげんよう	高橋純	4回　12人　平均70.4歳
2013年	松ぼっくり	唄う平成お宮の松	高橋純	6回　13人
2014年	座・夢	ばんざい東北オリンピック	高橋純	5回　11人 西和賀町老人クラブ連合会創立50周年記念事業

（筆者作成）

らとの交流・連携を蓄積し，旧湯田町は鄙の地でありながら豊かな文化的環境を醸成してきた[38]。

具体的な銀河ホールの自主事業の企画・実践は，町民に必要とされる文化施設のあり方を追求してきた町の担当者新田満の努力に負うところが大きい。新田は，国民文化祭開催を契機とした公立ホールの整備に計画時点から携わり，定年まで１年を残して退職するまで，町教育委員会の職員としてホールの運営を担った。その中で，とりわけ腐心したのは，ぶどう座という歴史も実績もあり全国的にも知られる劇団のためのホールではなく，町民にとってのホールとしてどのような活動をすべきか，ということであった。町の年間予算額 40 億円に対し，銀河ホール建設費は約 13 億と３分の１を占める巨額なものであり，その施設が町民に必要とされるものでなくてはいけないと，町職員としての切実な思いから，様々な事業が構想されていった。新田自身は国体に出場するようなスポーツマンで，演劇には全く関心がなかったというが，知識がなければ施設運営や，外部の演劇専門家と渡り合えないと考え，時間や費用を厭わず演劇について勉強し次第にプロデューサーとしての力を身につけていく[39]。

まずは 1993 年に開催された国民文化祭のレガシーを継承すべく「銀河ホール地域演劇祭」（地元のぶどう座のほか岩手県内，東北管内，その他の地域からひとつずつ劇団を招聘して上演する演劇祭）を開催するほか，大人を対象として地域住民が参加する演劇講座，小中学生のための演劇講座を継続的に開催し，多くの町民が舞台に立つ機会を作ってきた。そのことによって舞台に立つのは劇団ぶどう座，という町民の固定観念を次々と壊していく。残るターゲットは高齢者だけというときに，湯田町社会福祉協議会事務局長（当時）高橋純一と意気投合，高齢者向けに演劇講座を開始することとなる。高橋は新田に誘われて，一般向けの演劇講座に参加し，すでに銀河ホールの舞台に立つ経験をしており，演劇の面白さを味わっていた。また，高橋自身にも高齢者が「慰問される」だけの受け身な存在ではなく，自ら表現することによって生きがいを感じたり，社会に貢献できるという実感を得られるのではという思いがあった。

銀河ホールのシニア演劇は「平和街道高齢者障害者演劇ネットワーク事業」という名称で 1999 年から始まり，2005 年の市町村合併は休止，その後高橋が退職する 2014 年まで続けられた（表４）[40]。その運営は，地域の高齢者の状況に配慮した工夫に満ちたものだった。特定の地域で特定の人だけが参加する事業では，町にとって公共性は低いと，新田は常に事業の継続と広がりがどうすれば確保できるかを考えていた。対象は 60 歳以上の高齢者で，旧湯田町のほか，隣接する旧沢内村，北上市，さらには県域をまたいで接する秋田県旧山内村（現横手市）からも参加者を募った。出かける機会の少ない高齢者にとって，新たな仲間づくりにつながる。行政域を超えて高齢者を募るため，社会福祉協議会の横の連携が推進された。また県域を超える高齢者の演劇という事業は，町内外の注目を集めることになった。

むろん東北地方の山間部の高齢者が，自ら進んで「演劇講座」に応募するわけはなく，参加者募集には，介護ヘルパーが大きな役割を果たした。常日頃お世話になっているヘルパーさんのお誘いとなれば，なかなか断りにくい。当初参加した高齢者は，「お世話になっている人に頼まれたから」，「ただお茶を飲んでおしゃべりするだけだからと言われて」，と「だまされて」集まってきたのだった。しかし，最終的には「あんたにだまされた。でもだまされて良かった，っちゅう人が多かった」と高橋は振り返る。

全体スケジュールは，9 月から 10 月まで週に２回銀河ホールで練習，11 月から 12 月にかけて，参加者の地元市町村や社会福祉関係の会議，イベントなどで上演し，最後に銀河ホールで上演する。地域間交流が目的のひとつであるため，１回発表公演して終わりではなく，各地域を回って上演する。多い年には７回もの上演が行われている。複数の場所で本番があるということは，参加する高齢者にとっても運営側にとっても大変な労力であったと推察されるが，そのことで地域間の交流は促され，参加者同士の絆も深まったはずだ。より多くの高齢者に広く参加してもらうため，毎年メンバーは総入れ替えされ，劇団も毎年新しく名付けられた。同じ舞台を踏んだ同期の参加者は，公演終了後も忘年会や花見で集まったり，年賀状のやり取りをして交流が続いた。

「本番」が避けて通れない演劇は，高齢者に変化をもたらす。最初はしぶしぶ参加していた人も，稽古が進むに連れ，「自分が欠けては本番ができなくなる」，「人前に出るからには，いいところを見せたい」と誰もが本気になってくる。自分からアイディアを出すようになったり，お互いに協力しあってひとつの舞台を作り上げようと意欲的に変化していく。そして舞台が終わった時の晴れ晴れとした輝くような表情に，高橋は大いに感動し，その面白さが事業の推進力になったと語る。

上演作品は，当初は参加者にも観客にも親しみのある宮沢賢治や木下順二の作品が取り上げられた。

その後，ぶどう座の川村が新たに書き下ろした民話や，秋田県横手市在住で劇作家高橋純が書き下ろした「歌入り芝居」の上演が中心となっていく。もともと芸能が盛んな山間地集落では，歌や楽器，踊りなど何かしら得意技を持っている高齢者もおり，それを組み入れる舞台となっていった。演出は，青森市の劇団「支木」の演出家中野健が，1999年から全作品を担当している。稽古が始まると，中野は冬季のみ使われる社会福祉協議会の職員宿舎に2ヶ月滞在した。当初は普通の演技訓練から始めたが，だんだん高齢者の身体状況やひとりひとりの体調や能力を考慮して進めるようになった（中野 2008）。また，セリフ忘れに対して，舞台上で共演する高齢者がセリフを堂々と補うなど，面白く見せる演出を工夫したこともあった。出演者自身が衣装や演出にアイディアを出せるよう，参加者の意見を尊重することで，だんだんと高齢者の意欲も増した。参加者の体力や特性に配慮しつつ，高齢者の技術や知恵を反映できるような，演出家が全てを決定するのではない余地のある演出が，演出家と参加者の間に信頼を育み，また達成感につながる創造プロセスに寄与したと考えられる。

費用の捻出にも，様々な工夫が積み重ねられた。ひとつの補助金には連続3年しか応募できないことも多いので，「手を変え品を変え，様々な補助金に応募する。各地の社会福祉協議会にスポンサーになってもらって会場費を浮かせ，公演費用を捻出してもらう。福祉大会の講演のアトラクションに高齢者の演劇を上演することにして公演費用を出してもらう」など高橋は，上演費用を負担してくれそうな福祉関係の組織や行事を探しては，売り込むという営業活動も担った。さらに，上演の際各地を回るので，移動は高橋自身が社協のマイクロバスを運転したという。残念ながら，新田と高橋がそれぞれの現場を離れたことで銀河ホールの高齢者演劇事業は終了してしまうが，地域の演劇人，舞台制作を担う行政スタッフ，高齢者福祉の専門家という3者が，協働しながらそれぞれの領域で力を発揮することで，銀河ホールのシニア演劇は大きな成果を生んだのである。

V　超高齢社会におけるシニア演劇

本稿では，シニア演劇の広がりと特色を概観し，特に演劇人のイニシアチブによるシニア演劇を中心に，具体的な活動内容，高齢者ならではの演劇活動の特徴や課題を見てきた。

先行研究，新聞記事，インターネットの情報から収集したシニア演劇の活動団体数は100を超えたが，地域コミュニティや生涯学習グループなどを母体とする，アマチュアの高齢者による演劇活動は非常に広い裾野を持ちその全容を把握するのは困難であること，また2000年代後半以降，プロの俳優や演出家など演劇人や劇団によるシニア演劇の活動が増えていることが確認できた。

10年以上続いた4事例から，身体を使うグループ活動である演劇表現は，高齢者の身体的・認知的特性に配慮した活動を行うことで，高齢者にとって健康の維持や活力源として一定の効果を持ちうること，また，観客の前で演じるという行為を通じて，観客とシニア参加者双方に，高齢者イメージを変化させる可能性があることが分かった。

シニア演劇を指導する演劇人からは，中高年に蓄積された生活感や人生の重みが，プロの俳優にはない舞台上でのリアリティを持つことの魅力，またアマチュアならではの舞台に向かう真摯さや必死さが演劇の原点を気づかせる，と言った発言が聞かれた。演劇人にとって，高齢者の個性的な身体は，新たな作品を作る刺激を与えるという芸術性に資する側面があることは確認できた。しかし，実際にそのシニア演劇の活動から，「新しい演劇作品」が生まれているのかどうかは，より詳細な作品上演の検討が必要であると思われる。特に，今回取り上げた事例は今のところ元気なシニア層の活動だが，参加者の加齢が進み，身体や認知機能に衰えが出たり，家族の状況の変化で参加が難しくなるというケースも出てきている。自分自身がプロンプターとして裏に入らざるを得なくなった鯨が，座員が歳をとったから活動に参加できなくなった，ということにしたくないと語るように，セリフが覚えられなくても，認知症が進んでも，体力が落ちても，それでも可能な「超高齢者」演劇が可能かどうか。そのためには，西和賀町のような福祉領域との相互理解と連携，ゴールド・シアターとネクスト・シアターのような多世代グループの交流と支援関係の構築も必要だろう。

また，より積極的に「老い」の特性に着目した演劇創造への挑戦があって良い。例えば，参加する高齢者の記憶や体験を積極的に用いた舞台作品や，高齢者の身体特性や語りのあり方に着目し即興性に力点を置く舞台作品など，演劇人による演劇を拡張するシニア演劇も登場している。それらについては稿を改めて論じる予定である[41]。

シニア演劇の活動を核としながら，年代，地域，専門領域を超えた連携と協働によって，進展する超高齢社会でシニア演劇は，「老い」への向き合い方を

変える力を持つだけでなく，西洋近代的な演劇観を相対化するような表現を生み出す可能性がある刺激的な表現分野となることが期待される。

付記

本稿は，JSPS 科研費 JP18K00236 の研究成果の一部である。

謝辞

シニア劇団の情報収集，またシニア演劇を捉える枠組みについて，「シニア演劇 web」主宰の朝日恵子氏より懇切丁寧なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

また，ご多忙中にもかかわらずインタビューに応じてくださったシニア演劇関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

1 厚労省「人生 100 年時代構想会議」 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000207430.html

2 シニア演劇 web http://s-geki.net/html/gekidan_index.html 2020年 8 月 27 日現在の数。高齢者のための演劇教室や，ひとつの団体が運営している複数の劇団も個別にカウントされている。なお，長年活動を続けて参加者が高齢化してしまった老舗劇団や，高齢のプロの俳優が集まって活動する団体は含まない。

3 2013 年は南アルプス市で 15 団体，2015 年に仙台市で 10 団体が参加した。次回はオリンピック・パラリンピックに合わせて，東京で 2020 年 6 月に開催予定だったが，2021 年に延期された。各回の参加（予定）団体は，NPO 法人シニア演劇ネットワーク会報，映像資料（DVD），開催チラシ・パンフレットにより確認した。また，表 1 中「アトリエ劇研」は運営している複数のシニア劇団のうちのいずれかが参加している。菜の花プラザシニア団，BB★GOLD は，劇団の名前が途中で変わっているが母体は同じである。

4 WHO では 65 歳以上を「高齢者」，日本の後期高齢者医療制度では 65 以上 75 歳未満を「前期高齢者」，75 歳以上を「後期高齢者」と呼び，定年年齢は総労働力人口減少を回避しようと時代につれ引き上げられてきた。しかし，様々な機関や商業サービスにおける「シニア」割引などには「45 歳以上」という設定もあり，中高年が「老人」や「高齢者」と自認する年齢も人それぞれで，とりわけ平均寿命が延び続ける現代日本において「高齢者」を年齢で定義するのは難しい。

5 http://s-engeki.net/companion/（2020 年 8 月 27 日確認）

6 劇団大阪，発起塾（大阪市），アトリエ劇研（京都市）は複数のシニア演劇活動を運営しているが，運営主体１件とカウントした。

7 「シニア，高齢者，お年寄り，老人，シルバー」と「演劇，劇団」を含む記事を検索した。

8 梶谷（2015）は，72 の活動・団体について設立年，運営主体（行政，市民，演劇人），活動地域，設立経緯を整理している。

9 園部（2015）は，高齢者が演じる活動だけでなく，福祉施設への出前公演といった高齢者の「観劇」活動のねらいに関する記述についても検討している。

10 島根県社会福祉協議会が運営する（原則）60 歳以上を対象とした生涯学習の場で，1989 年松江市に「東部校」，1990 年浜田市に「西部校」を開校し，これまでに 4 千人超の卒業生を輩出している。現在は，「シマネスクくにびき学園」という名称で，社会文化科，園芸科，陶芸科，健康福祉科の 4 学科があり 2 年制を採っている。また，卒業後もサークル活動を続ける高齢者間のネットワーク支援も実施している。

11 「八老劇団」ホームページに受賞履歴が記載されている。http://hamada-sumiko.qee.jp/tuite/top-3.html

12 多々良(2005，18)によれば，歴代メンバーは明治 37 年生まれから昭和 17 年生まれで，50 代前半から 70 代前半で参加しており，1975 年から大石が亡くなるまでの間に合計 12 名が参加した。

13 2003 年公開，監督渡邊孝好，出演者に淡路恵子，西田尚美，風見章子，草村礼子，イーデス・ハンソンなど。「ほのお」をモデルに，高齢の女性たちがひょんなことから演劇上演をすることになるが，その過程で起こる出来事を描く。

14 2009 年大石さき 94 歳の時の「ほのお」上演の様子を動画サイトで見ることができる。 https://www.youtube.com/watch?v=E4dJQBPhudo(2020 年 8 月 27 日確認)

15 流山寺（2006）67 ページ

16 その後 2001 年 1 月 5 日朝日新聞夕刊「才のカタチ・型破りな表現者たち：２」で「素人役者」と題した記事で取り上げられている。

17 42 歳は参加資格がないのだが，本人がどうしてもと希望した。『せりふの時代』(2006) 72 ページ

18 流山児（2018）

19 小林裕子「「芸濃い町へ」 シニア劇団」朝日新聞 2018 年 4 月 15 日朝刊三重県版

20 日本劇団協議会(2019)15 ページ

21 小林による前掲朝日新聞記事中の流山児の言葉だが，

シアターRAKUによる2019年5月4日の本多劇場公演『女の平和』は，まさにその形容通りの舞台だった。

22 流山寺（2006）69ページ

23「劇団楽塾,創立10年で公演　48～65歳の女性14人」2007年4月28日朝日新聞夕刊be土曜6面

24 本項の記述は,かんじゅく座公演観劇(『みのりの畑』),映像資料(『つぶより花舞台』,『方舟は飛沫をあげて』),2018年5月24日中野ザ・ポケットでの鯨エマ氏へのインタビューによる。

25 2020年9月25日にかんじゅく座オフィシャルサイトhttp://kanjukuza.com/を確認したところ，18年の定期公演後，朗読チームは閉鎖，現在2チーム体制となっている。

26 朝日(2011，2015)，園部(2015)，梶谷(2015)による。

27 橋田他（2007)，徳永（2013）がある。

28 さいたまゴールド・シアター　オフィシャルサイトhttps://www.saf.or.jp/gold_theater/（2020年8月27日確認）

29 徳永（2013)16ページ

30 ゴールドのメンバー，竹居正武氏の教示による。

31 山口宏子「地域の劇場をたどって：9　巨匠の遺産，埼玉の金色」朝日新聞2018年8月30日夕刊東京本社記事

32 2017年井上尊晶演出『さいたまゴールド・シアターPro・cess2017』,『鴉よ,おれたちは弾丸をこめる』(再再演),6年ぶりの新作として岩松了作・演出第7回公演『薄い桃色のかたまり』，2018年構成演出岩井秀人・番外公演『ワレワレのモロモロ』，2019年リーディング公演・井上尊晶『蜷の綿―Nina’s Cotton』が上演された。次回公演は，松井周作・演出で2021年2月に予定されている。

33 2018年秋，モリエール原作『病は気から』をもとにノゾエ征爾による脚本・演出で，数百人のゴールド・アーツ・クラブ参加者が出演し，上演された。

34 国際交流基金　アーティスト・インタビュー2009年10月28日
https://performingarts.jp/J/art_interview/0910/art_interview0910j.pdf

35 『地域創造』(2005)，吉本（2011），『造景』(2001)，小野田（2000）など多数。

36 本稿の記述は，関連する文献資料のほか，2018年9月1日銀河ホール・ホワイエにて行った新田満氏，高橋純一氏へのインタビュー，「第26回銀河ホール地域演劇祭」における参与観察に基づいている。

37 開館時は「ゆだ文化創造館」であり，2005年に湯田町と沢内村が合併し西和賀町となった。

38 代表の川村光夫は，2020年8月5日98歳で亡くなった。

39 現在の新田の名刺には，劇団前進座アドバイザー，日本演出者協会会員，舞台芸術コーディネーターと言った肩書が並ぶ。

40 『西和賀町老人クラブ連合会創立50周年記念誌』および「全国生涯学習ネットワークフォーラム2013年岩手大会」ポスター
(http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/zenkokuNF/15nisiwaga.pdf）を参照し作成した。

41 回想法を参照した細見佳代による「私の道プロジェクト」,認知症の高齢者介護をヒントにした菅原直樹による劇団OiBokkeShi の活動などを挙げることができる。

文献

朝日恵子（2006）高齢者による表現活動の意義と可能性についての一考察-岩手県湯田町のシニア演劇を事例としてー」大阪市立大学大学院修士論文.

朝日恵子(2011)「シニア演劇の現状報告」『上方芸能　特集シニア演劇の時代へー表現する市民の広がり』(179),11-17.

朝日恵子（2015)「シニア演劇，その後」『上方芸能(特集演劇のゆくえ ： 関西の課題)』(195),19-23.

橋田欣典・強瀬亮子・須賀綾子（2007)『蜷川幸雄と「さいたまゴールド・シアター」の500日―平均年齢67歳の挑戦』平凡社新書.

梶谷智（2015)『地域社会におけるシニア演劇の可能性―箕面市の劇団「すずしろ」を事例に―』静岡文化芸術大学修士論文.

鯨エマ（2020)「スマート・エイジング」『清流』清流出版9月号,47-49.

中野健（2008)「レポート高齢者・障害者演劇事業―西和賀町からの報告―」『演劇会議』東・西日本リアリズム演劇会議合同機関誌.Vol128,27-29.

日本劇団協議会(2019)「検証座談会 シニア劇団，隆盛の今」『Join』公益社団法人日本劇団協議会機関誌（94),12-21.

西和賀町老人クラブ(2015)『春陽』西和賀町老人クラブ連合会創立50周年記念誌実行委員会.

小野田泰明（2000)「演劇をとおしてよみがえる現代のフォークロア」衛紀生・本杉省三編著『地域に生きる劇場』芸団協出版部,168-179.

太下義之（2016)「Creative Agingのための文化政策」『季刊政策・経営研究』Vol.4，85-128.

清水裕之(2001)「ゆだ文化創造館銀河ホール設計あれこれ」『造景』建築資料研究社,70-81.

園部友里恵（2015)「高齢者の演劇活動の展開:―活動のねらいに着目した新聞記事の分析から― 」『演劇学論集』

日本演劇学会紀要 60, 47-67.
高橋典成・金持伸子（2009）医療・福祉の沢内と地域演劇の湯田 ： 岩手県西和賀町のまちづくり（居住福祉ブックレット　著者名日本居住福祉学会［編］, 17, 東信堂.
多々良栄里（2005）『おばあちゃん劇団　ほのお　大石さきと愉快な仲間たち』新風社.
徳永京子（2013）『我らに光を ---さいたまゴールド・シアター 蜷川幸雄と高齢者俳優 41 人の挑戦』河出書房新社.
東海教育研究所（2013）「インタビュー　この人の“実感”を聞きたい　鯨エマさん（役者・劇作家）シニア劇団は人生の歩みと共に」『望星』44(12)東海教育研究所, 58-64.
土屋典子（2005）「シニア演劇を岩手・秋田の市町村で上演　福祉協議会との連携で広域化が実現:岩手県湯田町ゆだ創造館「銀河ホール」」『地域創造』2005 年 Vol.17,10-15.
流山児祥（2006）「インタビュー演劇の原点へ」『せりふの時代』2006 年夏号,66-73.
流山児祥（2018）「「普通の人々」との熱い出会いを求めて～シアターRAKU2018 東京・三重・台湾高雄 3 都市ツアー～」『テアトロ』カモミール社,45-47.
吉本光宏（2011）高齢者の潜在力を引き出すアートのポテンシャル　アートが拓く超高齢社会の可能性 『ジェントロジージャーナル』No.11-009,ニッセイ基礎研, 1-15.
「特集 芝居と人生―50 歳からの演劇」『せりふの時代』VOL.40,2006 年,小学館.
「特集　老いの領分」『悲劇喜劇』2018 年 11 月号,早川書房.